

主体的・対話的で深い学びに関する研究

校内研究への支援の在り方 ―校内研究の活性化を目指して―

副主幹・指導主事	笠井 さゆり	主 幹・指導主事	平沼	公香
副主幹・指導主事	小宮山 隆	副主幹・指導主事	河西	絵美
副主幹・指導主事	後藤 由紀	指導主事	萩原	義晃

キーワード 校内研究の活性化 分析結果を授業改善に生かす 充実感をもてる授業研究

I 主題設定の理由

総合教育センターの機構改革に伴い、平成30年度より立ち上げた、研究協力校と協同的に「授業づくり・学校づくり」を推進する実践研究を今年度も継続する。これは、本センターが各学校に対してどのような支援を行うことができるかを探るものである。

各学校では学校や地域の特色を生かした校内研究を推進している。しかし、多様化・複雑化する教育現場において、その進め方に多くの学校が様々な悩みを抱えていることが、本センターが行っている校内研究主題等アンケートから明らかになった。そこで本研究では、支援の在り方を探るにあたり、現在、各学校で「授業づくり・学校づくり」の柱の一つとして位置付けられている校内研究に着目していく。

小学校チームは、今年度、昨年度からの研究協力校である道志村立道志小学校に加え、新たな研究協力校として富士川町立鯉沢小学校とも連携を図る中で研究を進める。同一研究協力校で複数年にわたり協同研究を進めることで、より系統的・計画的な実践の構築の可能性を探ることを意図している。具体的には、各校からの要望を踏まえ、本センターのシンクタンク機能を生かした各種学力調査の分析に基づく提案等を行い、研究協力校における校内研究の活性化を目指す。さらに、研究内容を県下に広げ、各学校の校内研究の活性化につなげるとともに、各学校への有効な教育支援の在り方を探りたいと考える。

II 研究の目的

研究協力校からの要望に加え、本センターのシンクタンク機能を生かした各種学力調査の分析に基づく提案等が、研究協力校に対してどのような成果と課題をもたらしたかを検証することで、各学校の校内研究への支援の在り方を探る。

III 研究の方法

- ・研究主任と校内研究の運営に関する連絡を密にし、情報提供や指導・助言をする。
- ・学習会、学習指導案検討、研究授業、研究会の講師を派遣する。
- ・各種学力調査の分析結果を生かした授業改善の在り方について提案する。
- ・「授業研究の進め方」を提示し、授業づくりや授業研究会について見通しをもてるようにするとともに、「明日の授業に生かすシート」を活用することで、一人一人の授業改善に向けた具体的取組につながるような支援を行う。
- ・検証の手立てとしてアンケートを実施し、教員の変容を把握する。

IV 研究経過

1 センター研究日

4月13日（月）オリエンテーション

4月23日（木）センター研究

- ・研究計画の検討
- ・研究の方向性や支援内容の確認
- ・学校訪問計画作成

5月28日（木）研究計画発表会

6月18日（木）センター研究

- ・1学期の支援内容の検討

7月10日（金）センター研究

- ・2学期の支援内容の検討

9月24日（木）中間発表会

10月13日（火）センター研究

- ・2学期の支援内容の検討

11月 5日（木）センター研究

- ・3学期の支援内容の検討

11月19日（木）山梨大学連携教育研究会

12月23日（水）センター研究

- ・所内発表会の検討

1月14日（木）センター研究

- ・所内発表会の検討

- 1月21日（木）所内発表会
- 2月 8日（月）センター研究
 - ・研究紀要の検討
- 2月18日（木）センター研究発表大会

2 学校訪問

道志小	鯉沢小
5月27日（水） ・委嘱状交付 ・模擬授業，学習会	4月 2日（木） ・委嘱状交付
6月 3日（水） ・学習指導案検討	6月 5日（金） ・学習会
6月17日（水） ・研究授業，研究会	6月24日（水） ・示範授業，学習会
6月23日（火） ・一人一実践授業	7月15日（水） ・学習会
8月24日（月） ・分析結果説明	8月19日（水） ・採点講習会 ・結果分析
9月16日（水） ・学習指導案検討	9月 9日（水） ・学習指導案検討
10月 5日（月） ・一人一実践授業	・分析結果説明
10月21日（水） ・学習指導案検討 ・一人一実践授業	10月16日（金） ・学習指導案検討
11月 9日（月） ・一人一実践授業	10月28日（水） ・拡大校内研究会
11月19日（木） ・拡大校内研究会	12月 4日（金） ・学習会
12月 3日（木） ・一人一実践授業	
2月22日（月） ・学習会	

V 具体的な取組

小学校チームは、研究協力校の実態と要望に沿った支援を行い、それぞれの校内研究が活性化されるように努めてきた。前述の主題での研究は3年目となり、本センターのシンクタンク機能活用の方向性が明確になった昨年度までの取組を生かし、研究協力校に具体的な支援方法を示しながら進めてきた。

研究協力校では、新型コロナウイルス感染症対策のため、年度当初の休校措置や外部からの訪問を控えるなどの対応により、予定していた内容で研究を始めることができなかったが、6月から学

習会を重ね、授業改善に向けた歩みを進めることができた。

1 研究協力校のニーズに応じた柔軟な支援

本チームでは、研究協力校のニーズに合わせてセンター指導主事を校内研究会に派遣している。校種の枠を超えた指導主事で構成されているため、教科指導のレパトリーが広がり、様々な視点からの指導・助言が可能である。また、本チーム以外に相談支援部や情報教育部の指導主事に指導・助言を依頼することもできるので、ニーズに沿った研究会を行うことが可能である。

研究協力校への支援に際して、センター指導主事は、学校教育実践を専門的な見地から支援する立場であるということを明確にしつつ、教員の校内研究への前向きな意欲を喚起し、積極的な取組を継続できるように支援している。

（1）学習会への講師派遣 —鯉沢小学校—

校内研究テーマ『確かな学力を身に付け、生き生きと学び合う児童の育成～算数科の学習における「主体的・対話的で深い学び」の実現を目指して～』に沿った支援計画を立てた。研究協力校としての取組のスタートに際し、どのように進めていくか具体的なイメージを共有するところから始めようと、学校からの要望に沿って、算数の授業づくりに関して複数回の学習会を行った。学習会を行うことは、全職員の共通認識を図ることができ、同じベクトル上で授業研究を進めることができるという利点がある。特に今年度は、1学期に通常の授業を行うことができなかった分、学習会を重ねることにより、学校全体で授業づくりについてのイメージを共有するための貴重な機会になったと考える。

また、研究協力校1年目であることから、取組の様子について丁寧に説明し、教員とセンター指導主事が共に授業をつくり、学校全体で授業改善に向けた検証をしていく研究であるという意識をもてるようにした。

学習会①「算数科の授業づくり」

算数科の授業づくりについての研究の方向性をそろえるように、全職員の目線合わせとなる学習会を行った。

・問題解決型の授業 ・板書 ・ノート指導 等

学習会②「6年 分数のわり算」(指導主事による示範授業をもとにした学習会)

扱った単元は、四則計算の集大成と捉えられる単元で、児童が既習事項を活用して解決する内容である。既習事項を振り返り、児童の考えをどのようにつないでいくのか、指導主事が示範授業を行った。その後、学習会を行い、教材研究の必要性や児童の考えをつないだ授業づくりを教員が理解しやすくなるようにした。

学習会③「算数科の見方・考え方について」

教員が○進法で加減乗除計算をすることで、児童のつまずきや困難さを体験する活動を設定した。教員が問題解決型の授業を体験することで、具体的な授業づくりのイメージができた

と考える。
・子供たちの考えを予想することの大切さ 等

今年度は、新型コロナウイルス感染症対策下における取組であったため、幅広く講師を選定する機会は得られなかった。センター指導主事の派遣に留まり、連携している山梨大学教職大学院のアドバイザーには学習会講師をお願いすることができなかった。講師派遣については、研究主任の校内研究運営に関わって、学習会の講師選定に役立つ支援であるため、今後も各教科・領域等の専門性の高いセンター指導主事を中心に、研究協力校が希望する内容に沿った講師を派遣していく。

(2) 継続した支援 —道志小学校—

校内研究テーマ『自ら考え、共に学びを深め合う子どもの育成 ～教科の授業を通して、学級集団の育成を推進させる取組～』に沿った支援計画を立てた。学校からの要望により、昨年度に引き続き、学校全体の授業力向上を図る研究の支援を行った。算数の授業改善に関する取組を継続し、通常の授業(一人一実践)と連動させた取組も継続して支援した。

今年度は、学校主体で研究を進める流れを明確にして推進することができた。研究協力校2年目となり、学校側の研究推進に対するイメージができあがっていたので、毎回の校内研究会はどんな目的で臨むのか、授業者への支援を通して学校全体にはどのような指導・助言が必要なのかなど、管理職や研究主任と相談をしながら進めた。

研究協力校では、昨年度の指導・助言を反映さ

せ、日常の授業づくりに意識して取り組んできた。しかし、毎年、半数近くが人事異動で入れ替わる環境下において、いかに研究を継続していくのが課題となっている。まずは指導主事が模擬授業を行い、授業づくりについて共通理解を図るようにした。そして、本研究2年目の教員が6月に研究授業を行い、道志小学校での授業づくりの方向性について、全職員で学び合えるようにした。今年度も学習指導案づくりから支援にあたり、授業を参観し、授業後の研究会で学習会の要素を盛り込んだ指導・助言を行うという一連の流れで関わることにより、授業づくりの方向性がぶれないようにすることができた。2年間、一貫して板書計画を作成する重要性を指導してきたことから、板書計画を立てることで本時の授業の流れを構想することが定着した。このことにより、教員が子供たちのつぶやきを拾おうと取り組んだり、何を問うか具体的に考えたりするようになり、「子供たちの考えをどう練り上げたらよいか」という新たな課題も生まれ、授業づくりへの意識を高めることができた。特に、今年度は同一の指導主事が継続して関わることができたので、学校が進める研究をさらに深めたり浸透させたりすることに効果があった。

一人一実践への支援については、昨年度、効果があったという振り返りから、今年度も継続して行った。この取組は、学習指導案(略案)づくりから支援にあたり、当日の授業を参観し、授業後の休み時間に指導・助言を行うという流れで行ってきた。本チームの指導主事が、支援を行いながら確立してきたスタイルである。通常の授業にも指導主事が関わることで、学級担任にとって、授業づくりに関する指導・助言が得られるだけでなく、日頃の実践の悩みなどを相談しやすくなり、授業実践への意欲の向上にもつながったと考える。2年間、全担任の授業づくりに直接関わったことは、「研究授業で得られた成果を日常の授業づくりに反映させ、学校全体としての授業力向上を目指す」という協力校の意図に沿った取組となった。

(3) 拡大校内研究会による授業の公開

他校の教員と討議することで研究をさらに深められるようにするため、また校内研究への支援の様子を周知するため、拡大校内研究会を行った。

9月から始まった学習指導案検討において、授

業者と共に学年やブロックで主体的・対話的で深い学びの実現に向けて、センター指導主事が支援を行った。「主体的な学び」、「対話的な学び」、「深い学び」の視点から授業者と協同して学習指導案検討を重ねたり、授業者が模擬授業を繰り返したりして構想を練り上げた。「教員の問いで児童が考えを深める」、「友達の考えにつなげることで、児童自身の考えを確かなものにする」など、共通理解の下、授業展開がなされるように支援することができた。

当日の研究討議では、ワークショップ形式の研究討議を行い、具体的な成果と課題が挙げられた。担当してきたセンター指導主事が指導・助言を行った。鰯沢小学校では、研究会に先立って「リフレクション」を行い、授業者の振り返り＝反省の話ではなく、どのような授業構想であったのかを具体的に研究主任と問答形式で示すようにしたことで、その後の研究討議の視点が定まった。この形態は多くの参加者から、自校の実践に取り入れたいと好評であった。また、山梨大学教職大学院の客員教授も参観し、指導・助言を行った。

今年度の拡大校内研究会は、新研究主任研修会の現場研修が充てられていたので、授業後の研究会は大変充実したものになった。参加者からは研究主任としての視点で意見が出されるので、活発で質の高い討議となり、研究協力校はもちろんのこと、参加者にとっても有意義な研究会となった。また、異校種参観でもあったため、小学校の視点にはない意見も出され、系統立った指導の重要性も感じることができた。

授業以外では、拡大校内研究会の運営に関する支援を行った。初めて拡大校内研究会を行う研究協力校にとってはどのように運営するのかが分からず、不安要素の一つになっている。公開研究会ではないことは理解しつつも、他校から多くの教員が参観に来るとなると、困惑する部分である。そこで、運営方法やタイムテーブル、研究討議の進め方などを提案したり、日頃の校内研究会にワークショップ型研修の形を取り入れたりした。研究協力校の教員が見通しをもつことができ、拡大校内研究会を安心して迎えることができたと推察する。また、今年度は新型コロナウイルス感染症対策のための対応が加わったため、研究協力校の不安感は強かったと思われる。安心して開催できるように事前準備や対応について連絡調整をする

中で、研究協力校では開催場所の変更やモニタールームでの参観に変更したり、センター指導主事が受付や参観時等の予防対策を徹底して行ったりするなどの対応を行った。

(4) その他の支援

道志小学校では、一人一実践の取組の中に特別支援学級での実践を含めている。今年度も2学級で実施するにあたり、相談支援部の指導主事に指導・助言を依頼した。該当児童の支援方法に関する学習会も併せて行ったが、専門的な支援方法を学ぶ機会となったことから、校内研究会の学習会として位置付けるとよいと考える。今後、各研究協力校での研究内容を考える際、通常学級に在籍する配慮が必要な児童への対応に関する支援にも触れることが多くなると予想される。学級経営に関する内容には、学習指導案検討や研究会の際に、それぞれの指導主事が触れるようにしているが、今後も学習指導と生徒指導は両輪であるという考えを根本に支援を行っていく。

また、研究協力校2校とも、学校側と相談し、「学習評価」に関わる学習会を行った。本チームには、校内研究のテーマに関わらない教科(国語・社会)の指導主事が所属しているため、その2教科の評価について触れる時間を設定した。2教科を同日に行う計画であったため、1教科あたりの時間が短時間となったが、研究対象の教科以外について学習できる機会を設定することで、次年度の研究や日常の授業づくりに関して、教員が新たな視点をもつことにつながったと考える。小学校チームに所属する全てのセンター指導主事が、教科専門的な見地から指導を行うことができる機会となった。

2 分析結果を授業改善に生かす

(1) 自校採点の実施

令和2年度全国学力・学習状況調査(以下「全国学調」)は、新型コロナウイルス感染症の影響により中止となった。本センターでは、以前より、調査実施後に自校採点を行い、各学校での授業改善に活用することを推奨している。そこで、研究協力校の都合のよい時期に調査を実施し、自校採点及び分析を行った。

道志小学校では、1学期末の校内研究会で、全教員が国語・算数調査の自校採点を行った。採点

上、疑問に思ったこととして、説明不足や用語の曖昧さが挙げられた。2学期初めの校内研究会で、国語・算数の自校の採点結果からみられた傾向や授業改善例を指導主事が提示した。

鯉沢小学校では、夏休み中の校内研究会で、全教員が算数調査の自校採点を行った。指導主事が採点のポイントを示したり、教員からの疑問に答えたりしながら採点を行った。

自校採点後の感想には、「達成度、間違いやすいポイント、表現の足りない点がわかった」、「子供が文章を詳しく書いていて感心した」と、児童の学習状況を把握する記述が見られた。また、「教師がどのような力を子供に付けさせたいかという視点をもつことが必要だ」、「相手にわかるように伝えることは難しいが、その力を育てていくことが大切だ」、「立式したらその意味を説明できるようにさせたい」、「意欲をもたせるために、自分で考えることの楽しさを味わわせたい」と、求められている力に言及している記述が見られた。さらに、「担任だけでなく、チームとして添削指導をしていきたい」、「全職員で共通の意識をもつことが必要だ」と、複数の教員で採点を行い、学校全体で授業改善に取り組む必要性に言及する記述も見られた。

両校において、自校採点を行った成果として、自校の児童の学習状況を把握し、課題を見だし、共通理解を図る機会となったことが挙げられる。今年度は、全国学調が中止となったことで、教員が自校採点をする機会を得た。採点を行うことは、教員が、今、求められている力を理解することにつながる。その際、複数の教員で分析することで、学校全体で取り組む授業改善となる。

(2) 全国学力・学習状況調査小学校算数における課題

令和2年度の調査問題に、「計算の仕方の解釈・検討と統合的な考察(分数の加法と小数の加法)」がある(令和2年度 全国学力・学習状況調査解説資料 小学校 算数)。自校採点の結果から、本センターは、「計算の仕方の解釈・検討」を課題として挙げる。問題場面は、 $1/2+1/4=2/6$ と計算したはなこさんが、友達の考えから自分の間違いに気づき、直さなければいけない理由を答えるという文脈である。一方で、異分母分数の加法計算($1/3+2/5$)の正答率は高い割合であった。この

ことから、異分母分数の加法計算はできるが、その仕方を説明できないという実態がうかがえた。

「令和2年度 全国学力・学習状況調査 調査問題活用参考資料 小学校 国語・算数(国立教育政策研究所)」(以下「参考資料」)の学習指導の工夫に、「分数の意味や大きさに着目して、あらかじめ結果の大きさについて見積ったり、得られた結果の妥当性を検討したりすること」や「分数の意味や表現に着目し、計算の仕方について考察すること」が重要であると記されている。これらの指導を研究協力校における授業改善の取組に加え、実践することにした。

(3) 学習指導案検討時における課題の提示

全国学調の問題を活用し、国立教育政策研究所や、本センターから「各種学力調査を踏まえた授業改善に向けて」等、多くの授業改善例が示されている。これらを実際の授業で具現化するため、課題となる単元や学習内容に関する授業づくりに指導主事が関わり、研究協力校における授業改善につなげる。道志小学校は、前述の課題である「分数のたし算とひき算」(第5学年)を、研究授業で扱う単元として取り組んだ。また、両校は、計算の仕方の解釈・検討に関わった学習として「ひき算」(第1学年)を、研究授業で扱う単元として取り組んだ。

学習指導案検討の際、指導主事が、これまで本センターから授業改善例として配付した各種資料を用いて、自校採点の分析結果を提示し、育成したい資質・能力、本時や指導法に関わることを指導・助言した。

前述の「各種学力調査を踏まえた授業改善に向けて」から、日常生活の事象における量の大きさを、実感をもって捉える活動を取り入れる必要があることを提示した。具体的には、授業中、児童がより身近な量に置き換えて量を解釈する場面や、目的に応じた単位で量の大きさを的確に表現したり比べたりする場面を設けることが考えられる。

また、前述の参考資料に、計算の結果を振り返って確かめる活動や計算するために数量の関係を図に表す活動を取り入れる必要があることが提示されている。

これらは、全学年の学習に共通して取り組める内容である。研究授業当日だけでなく、日々の授業を通して、教員が、算数の学習を基に考察した

り、捉えたりする姿勢を示すことが大切である。なぜなら、児童が算数で学習したことを基に日常生活の事象を数量の関係に着目して捉え、数学的に表現・処理するようになることを考えるからである。

(4) 課題を意識した授業づくり

ア 授業改善例を具現化する

授業改善の取組には、学習会や研究授業に向けた学習指導案検討で指導主事が一方的に伝えるだけでなく、教員が日々の授業で実践し、児童の反応から実感したり、授業を振り返ったりすることが必要である。研究授業に関わる単元や前後の単元の学習を通して、取組の成果が現れているか、この後どう進めるか、学年やブロックの教員間で話題にし、改善していくことが、教員一人一人の学びにつながる。

実際に各研究協力校では、計算の仕方を解釈し合ったり、身近な量と結び付けたりすることに取り組んだ。来年度、経年的な課題への取組を校内研究会の学習会として1学期中に位置付け、以降の授業研究に生かしていけるようにしたい。

イ 学習指導案に反映させる

全国学調の自校採点の結果からみられる課題や手立てを、学習指導案の「単元について」の内容として記述した。以下は、研究協力校が作成した実際の学習指導案から抜粋したものである。

「令和2年度全国学調の自校採点の結果から異分母の分数の加法の計算の仕方を解釈することに課題があることがわかった。また、異分母の分数の加法計算については、ほとんどの児童が計算することができていた。このことから異分母の分数の加法について、計算はできるがその方法を解釈することができないということが考えられる。そこで計算の仕方を考える際、個々の考えを検討し、解釈する場面を設ける。もとなる1や単位分数を捉え、整数の加法に帰着して考察できるようにしたい。」

(道志小第5学年算数学習指導案より抜粋)

このように学習指導案に明記したことで、授業者が学力調査における課題や改善策を意識しながら単元を構想し、授業実践を行うことができた。また、学習指導案として残したことにより、分析

結果を授業改善に生かす方法の一つとして、研究協力校以外に周知することができた。

ウ 拡大校内研究会の実施

鯉沢小学校(10月28日)、道志小学校(11月19日)において、拡大校内研究会が行われ、合計3実践の授業が県内の教員に公開された。

拡大校内研究会の実施を通して、学力調査の分析結果を基にした授業改善例を研究協力校の教員が実践し、提案することができた。来年度も研究協力校の拡大校内研究会を通し、分析結果を実際の授業として具現化する手立てを周知していきたい。

3 作成物の活用

研究協力校の校内研究を支援するにあたり、一昨年度作成した資料「授業研究の進め方」と「明日の授業に生かすシート」を今年度も活用した。今年度は、主として「明日の授業に生かすシート」について言及する。

(1) 「授業研究の進め方」とは

多くの学校で行われている授業研究を、PDC Aサイクルによって、一人一人の授業改善につなげるための手立てを示したリーフレットである。

(資料1参照) 授業研究のPDC Aサイクルを「P指導案検討」「D研究授業」「C授業後研究会」「A個々の授業研究へ」という過程で捉え、それぞれの過程におけるポイントを示している。

校内研究でこのリーフレットの活用を促すことで、学校全体として、教員一人一人が主体的に関わる授業研究を目指している。

特に、CからAの過程に重点を置いて取り組むことが大切であると考え。リーフレットのサブタイトル～学んだことを個々の授業に取り入れよう!～にあるように、研究授業で明らかになった成果や課題を出して終わりにするのではなく、それを教員一人一人が自分の授業に取り入れていくことで、授業改善や校内研究の深まりにつながると考えた。また、自分自身の授業に取り入れる視点をもって研究授業を見ることによって、より自分事として考え、主体的な見方もできると考えた。

(2) 「明日の授業に生かすシート」とは

前述の「授業研究の進め方」で特に重視したC

からAの過程に焦点を当てて作成した記述式のシートである。(資料2参照)

このシートには、「C授業後研究会」で明らかになった成果や課題、改善策を記述する項目、それを実際に自分の授業にどのように生かすかを考え記述する項目、学校や学年で検討していきたいことを記述する項目が設けられている。以上のような項目を教員一人一人が記述することにより、CからAの過程を確実に結び付け、それぞれの具体的な授業改善、次のPDCAサイクルにつなげることを意図している。

(3) 実際の活用の様子

ア 鯉沢小学校での活用例

研究協力校1年目の鯉沢小学校では、年度始めの校内研究会において、上記作成物の説明を行った。「授業研究の進め方」の中で、特に意識したい点として、研究授業を自分自身の授業に生かしていく視点をもつことを挙げた。そして、その実践のために「明日の授業に生かすシート」に記述することが大切であることを伝えた。今年度は、学習会後の計3回実施した。

以下は、「自分の授業にどのように活用していくか」についての記述の一部である。

【5月】

学習感想を継続して活用する。
学習感想から児童の思考を読み取り、次時の授業づくりにつなげる。
問いや児童の声をもとに授業を構成する。

【8月】

授業中のつぶやきや学習感想から児童の実態を的確に捉える。
予想される児童の考えについて、広い視野で想定しておく。
解法は一つではないことに気付かせ、一人一人が分かりやすい方法で答えを導き出せるようにする。

5月の記述には、「学習感想」についての記述が多く見られた。授業を通して学習感想を授業に生かすことの重要性について再認識した教員の様子がうかがえる。さらに、学習感想を生かすために、「問い」、「既習事項の確認」、「学習感想からの次時の計画づくり」など、担当する学年や領域等に応じて、様々な活用方法が挙げられていた。

8月の記述には、「児童の実態把握」についての記述が多く見られた。授業を通して実態把握の重

要性について再認識した教員の様子がうかがえる。また、実態把握するために、「学習感想を生かす」、「様々な解法」、「考えられる児童の考えの入念な予想」など、担当する学年や領域等に応じて、活用方法が挙げられていた。

授業改善に対する視点や課題意識について具体的な記述になっているとともに、「児童」の視点に立った記述が多く見られるようになった。

イ 道志小学校での活用例

研究協力校2年目の道志小学校では、学習会及び研究授業、拡大校内研究会後の計3回実施した。以下は、「自分の授業にどのように活用していくか」についての記述の一部である。

【5月】

板書計画を立て、授業のゴールを明確にする。
板書に子供の考えを書き込み、問題解決の流れを視覚化する。
児童の考えを板書したところ、「学習感想が書きやすくなった」という記述があった。続けていきたい。

【11月】

発問を工夫し、児童のつぶやきをつなげる。
児童の反応やつぶやきを見取り、板書に残し、課題を解決していく。
児童が考える場面において、個々の児童の考えを全体で共有する。

5月の記述には、「板書」についての記述が多く見られた。授業を通して板書や視覚化の重要性について再認識した教員の様子がうかがえる。また、実態把握をするために、「授業のゴールの明確化」、「児童の思考の可視化」など、担当する学年や領域等に応じて活用方法が挙げられ、実践しての手応えについての記述も見られた。

11月の記述には、「つぶやきをつなげること」についての記述が多く見られた。授業を通して算数科における「児童の思考をつなげていくこと」の重要性について再認識した教員の様子がうかがえる。そして、「つぶやきをつなげる」ために、「発問の工夫」、「考える場面設定」など、担当する学年や領域等に応じて活用方法が挙げられていた。また、これまでの研究の中で出てきた「比較検討」、「思考の可視化」といった記述も多く見られた。研究が単発ではなく、教員の中で継続していることがうかがえる。また、研究協力校2年目ということもあり、授業参観の視点や活用についての記

述がより具体的になってきていることがわかった。

ウ 個々の授業に生かす

前述のように、「授業研究の進め方」で共通理解を図り、「明日の授業に生かすシート」を活用することで、研究の方向性を共有し、研究授業で明らかになった成果や課題を受けて個々の授業にどのように生かすかを考える様子がかがえた。それに加えて、長期的に校内研究に関わることで、同一教員の変容をみることもできた。

本シートの活用から実践へ反映させた、ある教員の事例を以下に示す。昨年度の「明日からの授業や一人一実践等で活用すること」に関する記述は以下のとおりであった。

【10～11月】…気付きから意識しようとしたこと

つぶやきを拾ったためあての設定。
児童の発言を、他の児童に説明させるなど、学び合いを行う。
安心感から発言へ。

【12月】…実際に取り組んだ様子

児童が主体的に考える場を設けた。
いろいろな角度から物事をみようとする姿勢が身に付いてきた。

意識して子供たちのつぶやきを拾うことや、考えをつないでいく場面を授業に取り入れたことで、自身の授業づくりに対する考え方が変化してきたことを感じ取る様子がかがえた。

今年度は、昨年度の成果を具体的に授業実践に生かした様子や、児童の反応から手応えを感じて自信につながってきた様子を感じられた。教員の記述や授業実践の様子は以下のとおりであった。

【6月】…研究授業を参観しての気付き

児童のつぶやきを板書していた。 机間指導で児童の考えを仲間分けして書き込んでいた。
--

…その後の授業で取り入れてみたこと

早速、つぶやきを板書してみました。 児童から「学習感想を書きやすくなった」と感想をもらいました。続けてみます。
--

昨年度から「児童のつぶやき」に関して意識してきた教員が、実際に研究授業を見て、つぶやきを生かした授業展開のイメージがもてた様子がかかる。自身の授業にも取り入れることで、手応えを感じていると考えられる。

その後の一人一実践の授業では、以下の5点について継続して取り組んでいる様子が見られた。

- 既習事項から始めることで、児童がつぶやきやすい設定にした。
- 自分の考えをもてるように、自力解決の時間を確保した。
- 机間巡視で児童の考えを把握し、比較検討に入るときの始めに発表する児童を決めていた。
- 児童の考えをより詳しく、わかりやすくさせていくために、児童の発言に問い返した。
- 出された考えを分類して板書した。

【11月】…拡大校内研究会からの気付き

比較検討について	(児童が)自分の考えを表現する。 (児童が)他者の考えを解釈する。 共通点を明らかにする。
対話を成立させる場面について	児童の意見を共有し、検討する。 児童から出た意見に問い返す。

【12月】…これまでの振り返りと新たな課題へ

児童の意見やつぶやきを黒板に残すことで、学習感想が書きやすくなった。
児童同士のつぶやきをつないでいくことの難しさが分かり、校内研でもどいう声かけや発問をするのか、話し合う機会ができた。
3学期は声かけや発問を工夫していこうと思う。

本シートを活用することは、小さな気付きを地道な授業実践の積み重ねに変えていき、授業改善へとつなげていく手立てとなり得るということを実感することができた一例である。

(4) 「明日の授業に生かすシート」の活用の有効性

本シートを活用した校内研究支援という視点では、(3)に示したように、学習会や研究授業から、教員が学びや気付きを得ていたことを確認することができた。また、その学びや気付きが教員一人一人の授業改善に結び付いているのか、どのように具現化されているのかを知ることが可能であることがわかった。さらに、個々の教員の記述について継続的にみていくことで、個々や学校全体の授業づくりへの意識や具体的取組の変容についても把握しながら支援を行っていくことも可能であることがわかった。

本シートは短時間で記述できるので、研究主題等を問わず、各校の校内研究に取り入れやすい。また、研究授業を単発で終わらせるのではなく、その後の授業改善につなげるための有効な手法の一つとなり得る。研究協力校以外の小学校においても有効活用が期待できる。

4 アンケートの実施

本研究の検証の手段として、7月と12月にアンケートを実施し、2校の教員の変容をみた。

(1) アンケート項目

- ①センター指導主事や山梨大学の支援による学習会について
- ②センター指導主事や山梨大学の指導・助言を取り入れた学習指導案検討、研究授業について
- ③拡大校内研究会の実施について
- ④「明日の授業に生かすシート」について
- ⑤センター研究協力校として取り組んだことについて
- ⑥センター研究に関することについての意見・感想

※①～⑤は充実度・満足度の自己評価尺度として「4：高い」「3：やや高い」「2：やや低い」「1：低い」で評価し、⑥は記述で回答

(2) アンケート結果

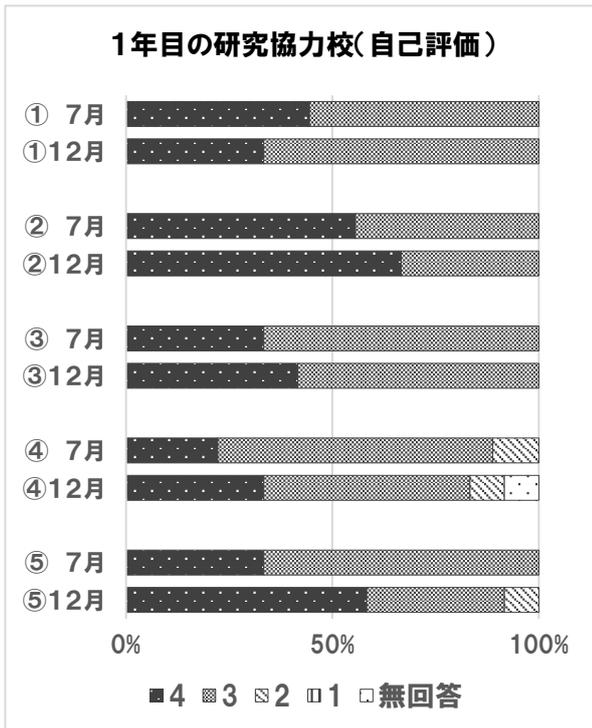


図1 充実度・満足度の自己評価（1年目研究協力校）

⑥【1年目研究協力校(記述回答)】

- 学べびや理解が深まったこと
学び合いや評価について、改めて勉強する機会に恵まれた。拡大校内研、日常の校内研への指導助言が、日々の授業づくりや実践につながったと思う。
- 継続(さらに深める)・意欲
研究だけで終わらず、協力校というチャンスを生

かし、日々の実践の中に1つ1つの学びが生かせるようにしていきたい。

○意見・提案

来年は一人一実践の授業を見せたい、ぜひ見てもらいたい。

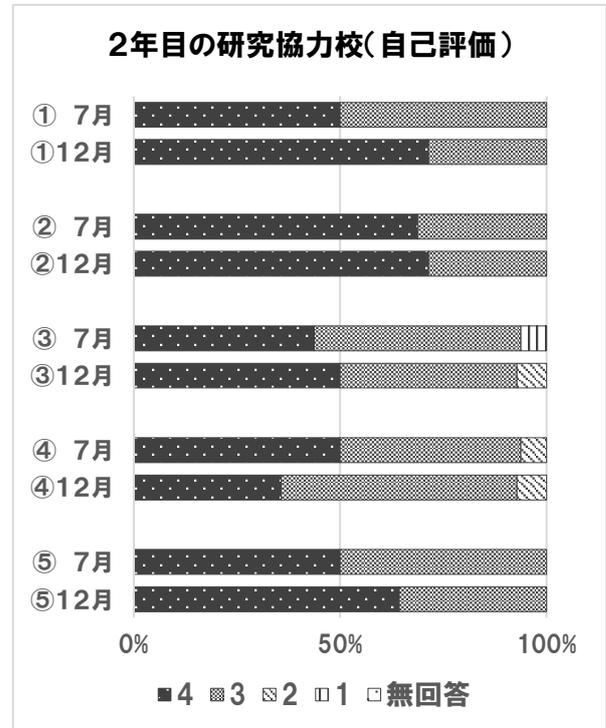


図2 充実度・満足度の自己評価（2年目研究協力校）

⑥【2年目研究協力校(記述回答)】

- 教材研究をすることの楽しさや厳しさ
指導案作成を通して、子供の見取りや板書などを想定することの必要性を感じた。一つ一つの授業について、教材研究を大切に、教師自らが考える人になることを大切にしていきたいと思った。また、教師同士でお互いの授業を見せ合うことで、よいところが吸収できたのも大きな成果だと思う。
- 深い学びに向けた研究
子供たちが自分の考えを図や言葉で表現したり、他者の考えを理解しようしたり、全員でつくる授業が子供たちの学びを深めることになることが学べた。
- 授業の組み立て方・積み上げ
めあてを常に意識し、それに向かって授業を組み立てていくことが重要だと再確認できた。教える時間、考える過程を大事にして、常に子供たちが考える姿勢をもてるように組み立てることが大切だと思う。教師・子供たちと学級全員で授業をつくり上げ、授業を組み立てていくことを常に心に留めていきたい。
- 今後に向けて
この取組を契機に、成長する教師を目指し、学んだことを授業に取り入れ授業改善を継続していきたい。学び合い、磨き合う文化を生成して、一人一人の先生を校内で育てられるよう、今後も継続して取り組んでいこうと思う。また、自分が学び続けるだけでなく、学んだことを周囲にも発信していきたい。

VI 今年度の研究の成果と課題

1 成果

(1) 有効な支援

研究協力校への有効な支援として以下の3点が挙げられる。

まず一つめは、研究協力校の実態や要望による様々な学習会の講師派遣である。本センターは、学校教育支援部、相談支援部、情報教育部等の部署からなり各教科・領域等の専門性の高い指導主事が所属している。また、山梨大学と連携し「教師力」の向上に努めている。それにより、研究協力校が必要としている内容の学習会を展開し、専門的な視点からの指導・助言ができた。

二つめは、「明日の授業に生かすシート」の活用である。授業を見合うという習慣や自分の学級の授業に生かすためにという視点を多くの教員がもてるようになり、学校全体として授業改善に取り組んでいくことができた。

三つめは、拡大校内研究会の実施である。各種学力調査結果から、課題となる単元や学習内容を授業として具現化した。また、拡大校内研究会の実施を通し、県内の教員に提案することもできた。拡大校内研究会は、協力校の教員にとって負担に感じる面もあるが、他校の教員の考えに触れることで、自校の校内研究の活性化にもつながるということを実感することができた。

(2) 継続的な関わり

教員のアンケートから分かるように、研究協力校として取り組んだことの満足度が両校とも7月から12月に向けて改善された。指導主事が年間を通して校内研究への支援を行うことで、校内研究や授業研究への意識が高まり、研究協力校の教員の満足度が上昇したと考えられる。また、各校の研究主任からは、指導主事が継続的に関わることで、研究の進め方について気軽に相談ができ、効果的で充実した研究を展開していくことができたという話が聞けた。研究主任の支援にもなったといえる。校長先生からは、どのように教職員を育てていくか、組織開発に生かすことができたことと感想をいただいた。校内研究を中心としながら、組織マネジメントへの支援の一端を担うことができたといえる。研究協力校と共通理解を図り、2年間という長い期間、継続的に関わっていくことで、上記のような成果が得られたと考える。

2 課題

以下の2点が課題として挙げられる。

一つめは、本センターの支援が終了した後も、各学校が主体的に取り組んでいくことができるような手立てを考えることである。各学校の授業改善に向けた取組をより主体的な取組へと導いていきたい。

二つめは、各種学力調査の分析結果を生かした授業改善の大切さを県内の学校に広めることである。研究協力校で得た成果を拡大校内研究会の実施を通して、今後も周知していきたい。

3 来年度に向けて

来年度も、研究協力校とより一層共通理解を図り、校内研究への支援を進めていく。

- ・「明日の授業に生かすシート」を活用し、教員の授業改善への取組につなげる。
- ・各種学力調査の分析の仕方を校内研究会の学習会として1学期中に位置付け、以降の授業研究に生かしていけるようにする。
- ・本センターのシンクタンク機能を生かし、研究協力校が研修したい内容に沿った学習会等の講師を指導主事が務める。

これらの取組を通して、県内小学校の校内研究の活性化に寄与していく。

【引用・参考文献】

国立教育政策研究所（令和2年7月）令和2年度全国学力・学習状況調査 解説資料 小学校 算数
国立教育政策研究所（令和2年10月）令和2年度全国学力・学習状況調査 調査問題活用の参考資料 小学校国語・算数

山梨県総合教育センター（平成31年3月）平成30年度研究紀要

【研究協力校】

富士川町立鯉沢小学校 校長 保坂 晋也
道志村立道志小学校 校長 雨宮 基博

【山梨大学連携教育研究会アドバイザー】

山梨大学 客員教授 小林 玲子
教授 山本 英寿 教授 饗場 宏
准教授 中込 繁樹

【総合教育センター研究アドバイザー】

次長 河住 悦久 主幹・指導主事 佐藤 望

授業研究の進め方

～学んだことを個々の授業に取り入れよう！～

指導案検討

研究授業

授業後研究会

□この単元（授業）で児童生徒に付けたい資質・能力が明確になっているか

- ・研究主題，研究仮説等と結び付いている
- ・児童生徒の実態（レディネス）を捉えている
- ・児童生徒に付けたい資質・能力につながる学習課題になっている
- ・教材の特性が生かされている

□本時の目標を達成できる学習展開になっているか

- ・児童生徒が学習課題を把握する手立てがある
- ・自分の考えをもつための時間を確保している
- ・友達と考えを交流する場面で話し合う内容を具体的に想定している
- ・明確な板書計画を想定している
- ・指導案の中に，児童生徒の姿が記述されている

□育成したい資質・能力の実現状況を見取る学習評価になっているか

- ・目標を実現した児童生徒の姿を具体的に想定した観点別評価規準を設定している
- ・評価規準に対応した評価方法の工夫がある
- ・学習評価を授業改善に生かすことを想定している（指導と評価の一体化）

□授業評価の観点が明確になっているか（授業観察の前）

- ・校内研の研究主題，研究仮説等と結び付いている
- ・全教員で共有している

□児童生徒に付けたい資質・能力が付いているか

- ・授業評価の視点を意識して授業を観察している

【児童生徒を 観察する視点】

児童生徒の学びを観察する

例）ノート記述
発言
反応 等

【教師を観察する視点】

指導する際の手立てや工夫等を観察する

例）発問
板書
コーディネート 等

□授業評価の観点にもとづき授業を振り返っているか

- ・協議の柱を明確にして話し合っている
- ・児童生徒や教師の発言，ノート記述，板書等，具体的な事実にもとづいて話し合っている

□全教員が主体的に協議に参加しているか

- ・ワークショップ型等の手立てを取り，全教員が主体的に参加している
- ・自分だったらどうするかを踏まえて発言している

□授業の振り返りから，成果や課題，改善策をもてたか

- ・一人一人が自分の授業に取り入れたい手立てをもつ
- ・全校体制で取り組む授業改善に向けた手立てを共有する

個々の授業研究へ

□授業研究で明らかになった成果や改善策を，授業に生かしているか

□取り入れたことを振り返っているか

- ・教師自身や児童生徒の変容を見取る

□全教員で取り組んでいるか

- ・校内研で実践を報告する時間を設け，個々で取り組んだことを共有する

例）一人一実践等の授業

指導案（略案）づくり

この単元（授業）で児童生徒に付けたい資質・能力が明確になっているか

本時の目標を達成できる学習展開になっているか

育成したい資質・能力の実現状況を見取る学習評価になっているか

授業観察の視点

授業評価の観点が明確になっているか

児童生徒に付けたい資質・能力が付いているか

授業後の振り返り

授業評価の観点にもとづき授業を振り返っているか

授業の振り返りから，成果や課題，改善策をもてたか

学んだことを一人一人の授業に取り入れる ～「授業研究の進め方」の活用～

氏名 _____

授業後研究会

□授業の振り返りから，成果や課題，改善策をもてたか

- ・一人一人が自分の授業に取り入れたい手立てをもつ
- ・全校体制で取り組む授業改善に向けた手立てを共有する

➔

本日の授業研究で明らかになった「有効な手立て」や「改善策」は何でしたか？

個々の授業研究へ

□授業研究で明らかになった成果や改善策を，授業に生かしているか

□取り入れたことを振り返っているか

- ・教師自身や児童の変容を見取る

□全教員で取り組んでいるか

- ・校内研で実践を報告する時間を設け，個々で取り組んだことを共有する

明日からの授業や一人一実践等で，どのように活用しますか？

今後，学校や学年として，どんなことを検討しておきたいですか？